

## 大いなる誓願を抱いて

山主 黒田 大圓

私がここに参りまして十七年目になるところでござ

います。最初は柱二本、六畳間ひとつで、どなたもここにお寺があるというようなことはまずご存じなかったようであります。たまたま縁がありまして私が住職をいたすことになりました。その理由といたしますのは、私は栃木県の大田原の生まれでございますが、男ばかりの七人兄弟で、父親は、学校には入れてやるからあとは好きなようにやれと言うので、種々の縁がありまして坊さんになりました。先般横浜の関内にある工業高校から講演の依頼がございまして、そこでお話し申し上げ、それが活字になってますので、そのお話しは

さて置きます。

私の実家は決して裕福な生活をしておりませんでした。はつきり申し上げまして、母親は大変苦勞いたしました。父親が食べる物も食わずに、寺の地続きの山を、将来の寺の為にと買い求めました。今日では、お墓に分譲しても相当の額になります。今日では、お舎のことですから、わずかなお金の額にしかならず、学資どころではありませんでした。父は先見の明がありました。ただ、それだけに当時の母はたいへん苦勞しました。

父親が大本山総持寺の副監院という役をいただき、



常時留守にして居りました上に、ふだんの時でも、中学、高校には三、四人、又、大学には、二、三人行って居りましたから、金があるわけはないんです。そういう寺に生まれ育ったせいか、私は裕福になろうとか物がほしいとかつねに思ったことはないんです。ただ皆様迷惑をかけたくないということを念じておりました。長男、次男が東京に出て、叔父の家に居候して大学に通わせてもらってましたが、いくら親戚でもいい顔するわけありません。そこで父親は、子供の大学

教育のためには、東京に建物を建てなけりやみんなに迷惑をかけるということで、一大誓願を立てて寺を作りましたのが、五反田の「桐ヶ谷寺」という寺であります。私はそこから大学に行きました。学校に行くのに、目黒から目蒲線に乗るんですが、運賃は十円でした。当時十円あるとパン一つ食べますから、金が無いとそこを歩きました。渋谷から駒沢まで、バスだと往復三十円、片道十五円、玉電に乗りますと二五円で五円やすいんです。安い電車に乗って節約したものです。

寺と申しましても名ばかりの小さな寺であり、収入も充分でなく、生活に困るような事もありました。その当時は、お墓を二万五千円でおゆずりしても、一時に支払いをしてくださるような方がいなかったのです。それを分割で三千円位づつ払っていたいたんです。それほどにお寺の経営は大変なものがありました。

それで長兄が目黒の不動さんで、滝に当たったんです。食えない寺だからお寺がよくなるように、一生懸命ご祈禱したのですが、それで倒れて死にそうになり入院

しました。痔が悪く、出血多量で死んでしまうかもしれないと言われましたが、元氣になり再び滝に当たり、なんとか食える寺にしたいと祈禱いたしました。ここで私はお不動さんというのをはじめて知りまして、長兄だけにそれをさせては悪い、私もお参りしなくちゃと、毎朝行つたんです。目黒の不動さんといえば有名なお不動さんで、私の住んでいた寺からだいたい十二三分、急ぐと七、八分ぐらいで行けるんです。毎日ただお参りしたんですが、その時に何かお願い事をしなきゃいけないと思いました。兄弟が多く、私は六男坊で、あまり役にも立たないから父は「ろくてなし」とよく言っていました。親にそこまで言われましたので常々私は親はあてにしないで生きていきたいと心に念じて居りました。

〈思いは世界へ〉

どこか行こう、こんな狭い六畳ひと間ぐらいの寺に、兄弟五、六人いて学校に行つてもしょうがない、世界

中まわつて勉強したいと、お不動さんに毎日頼みに行つたんです。たまたま私の兄が、最初に因縁を作つてくれましたんで、毎日行っている間に、自然に行かないと気持ち悪いようになりました。大学、大学院も終わり、総持寺に安居をいたしました。そして、今度は、アメリカに行こうと思つて、ロスにいる兄に連絡したら、「半年ぐらいの修行で何だっ!」とどやされて、仕方がないから永平寺へ行つたんです、それから日本一周をいたしました。また、総持寺に行き、修行を三年致しました。そして三年目の時、何処か外国へ行きたいという気持ちが高まつて居りました時、友人に「おいつ黒田、インドへ行こう。」と言われました。——そうだっインドだ、と思つたんですが、インドへ行くだけで当時五十万円かかるんです。二十年前の五十万円ですよ。とてつもない金です。それで私は、総持寺にお金を貸してくださいとたのんだんです。もしたら、総持寺ではいくらいるんだと言うんで、百万円貸して下さいと頼んでみました。



当時日本中から五人、特別僧堂といって特別に修行する人が集まって居りましたので、一人に二十万円を出してくださいとお願ひした訳なのです。よし、貸すと言うことでした。ところが、いよいよ手続きがはじまったら、前例がないから貸せないというんです。困りまして、私はナリスに頼むしかないと考え、草鞋はいて出かけたんです。そしたら、「先生、何しに来た」と言うので、「ちょっと話をしたいのです」と言うのと、「じゃ、あがつてください。いまだくさんの社

員が集まって、研修会をしているところで、これから講演の時間なんです。何でもいからとりあえず講演してくださいよ」と言うんで、講演することになって一時間しゃべりました。講演が終わると「ところで先生、用件は何ですか？」と言われましたので、「お金を貸してほしい。必ず返しますから」と頼んだ訳なんです。「で、幾らいるんですか」と言うから「五十万円位必要なのです。」と申しました。すると困ったような顔をして、当時の営業部長さんが、「五

十万円ですか……。じゃちよつと待って下さい」と社長さんに相談してくださったんです。社長さんは、「今日はとりこんでるから、考えときましよう。改めておいでいただきますよう」とおっしゃいました。

### へ一葉観音との出逢い

このお話をお願いに行く前に、私は永平寺におりました。永平寺と総持寺の特僧（注 特別僧堂の修行者）の交換研修があつたんです。実は、これは私が提唱したものでした。

研修を済ませて、ナリスに行く前に永平寺の駅に出て、時刻表を見ていたら、その下にウインドケースがあり、その中に一葉観音と言つて、一枚の大きな葉の上に観音様が乗っている彫り物があつたんです。素晴らしいなあと思ひまして、駅員室に入り、「これは誰が彫りましたか？」と聞いたら、山口元董と言うおじいさんだといわれました。何処にいますかと聞いたら、すぐ近くにいるというんです。「しめたつ」と思つて

尋ねてゆくと、七十ぐらいのおじいさんが、腰を曲げて出て来ました。私は、「駅で非常にすばらしい観音様を拝見しました。何か彫つていただきたい」とお願いすると、「わかりました。」と言うんで、それでは、「駅にある一葉観音様を彫つてほしい。ただあのままではなく、これから私はインドに行き、タイ国で修行するので、いつも携帯できるように、形を小さくして彫つてほしい。」とお願いしたら、よいと言うんです。私はその時、二十五歳でした。二十五歳になつても何も世の中に遺していない。私もし遠くて死んだらその仏様だけは帰つて来れるということと、もうひとつは道元禅師さまの故事を有難く思つたからです。道元禅師は今の中国、当時の宋の国に渡られ、命がけの御修行をなされ、天童山の如浄禅師のもとでお悟りを開き、二十八歳の時日本に帰られるのですが、映画「天平の臺」で御存知のように木の葉のような船ですから台風に逢えばひとたまりもないのです。道元禅師の乗った船も暴風雨に遭つて、あわや遭難……その状態に

なりました。その時道元禪師は一心に観音様を念じ、心静かに読経いたしました。すると、一枚の木の葉に乗った観音様が天から下りて来た、とみるや波が静まったと言うのです。

こうして道元禪師は救われて、無事日本に帰って来られました。その、道元禪師を救った仏さまが一葉観音様……。これだ、おれはこういう生き方をしたいと思ひ、おじいさんにお願ひをして一葉観音を彫ってもらうことになったんです。

#### へお不動様との出逢い

その時、おじいさんが「あんた何処の人だ」と言う。私は「目黒です」「東京の目黒か……。じゃ、あんたは目黒不動の子供か」「いや、目黒不動のせがれではないが、でも毎日お不動さんに行っていました」と申しました。「そうか」と言つて、私の顔をみて、「あんたに頼みがある」というんです。「なんでですか?」と言うと、「あんたお不動さんいらぬか」と言う。その

時は、お不動さんほしいなんて夢にも思つていなかったです。そしたら箱に入れて持つて来てくれたのがこのお不動さまなんです。「あんたに任せるから何処かに持つて行つて売つてくれ」という。「おじいさん、いくらですか」と言つと「いくらでもいい、材料代だけ欲しい。」というんです。そのおじいさんがこんな話をしてくれました。

「私は、お不動さんを二つ彫つた。一つは、日本の鉄工場の社長さんに彫つた。その人はまさに日本一になった。もう一つ、いいほうは残した。ところが、ごく最近のことだが、四国に霊媒者のおばあさんがいて、そのおばあさんが、ある時尋ねて来て、いうには……福井の山の中に大きな寺がある。そのふもとに霊験あらたかなお不動様があるから、早くそのお不動様をお迎えしろとお告げがあつた。それで永平寺にやつて来て、この近所に仏師はいないかと聞くと、いますとのこと。どこですかと聞くと近所だと言うので私の家にこられたのですが、霊媒者のおばあさんは、私に

こう言うんです。

「ここにお不動様がありますか。あつたら見せて下さい。」お見せしたら「まさに私が夢に見たものだ。どうしても、譲ってほしい。」とおっしゃいましたが、私は、これは、あなたには譲れないと断ったんです。そしたら、とても残念がつて、おばあさんは帰っていったが、それ以来気になって、夜も寝れない。死んでも死にきれないと思つていたところに、丁度貴方が来てくれたのでまかせる。」

と言つてお不動様を私に任せられた。

へナリスに借金  
ところが、私には一銭もお金が無い。ナリスが果たして五十万円貸してくれるだろうか。

たまたま、父親が、全日本仏教会の事務総長という役職についておりました、京都に出張しておりました。その折、ナリスより、お金の用意ができたという連絡をいただきましたので、父にも同道してもらいナリス

に参上しました。そしたら大きなお盆に紅白ののしをつけて「成寿堂本舗ナリス化粧品」と書いて、私ども父子のところへ持つて来て下さいました。ところが見たら、のし袋がペシャンコなんですネ。「まてよ。私は五十万円つていったのに間違えたかな?……。もし一万円か二万円だったらどうしよう。いまのうちに言わないと……。帰つてからお金がないなんて言えないし、それを受け取るか受け取るまいか……。しかし不安だ……。入れるの忘れたんじゃないかな」と思つて、取ろうか取るまいか迷つていたら、おもむろに「どうぞ」と言うんで、私も「ウワア!……。これ開けて見ようか、いくら入つていのか聞こうか」とドキドキして……。「イヤツ……。こんなに薄いわけないな」と思つて、おやじの顔見たら、おやじはだまつて、目をつぶつている。困つたなあと思つたが「ありがとうございます」と言つていただいて帰りました。おやじはまだ用務があつたので別れ、駅に来てカバンから出して中を見ました。入つてなかつたらどうしよ

うと……。そしたら、どうぞしよう。入ってました！五十万円の小切手が……。『バンザイ！』ととびあがりました。その姿を見た道行きの人々はおどろいておりました。

うれしくてうれしくて、五十万円に何度も合掌しました。それが私の最初の大感激でした。

へお不動さまはどこへ……

よし、これで行けると……。さて次はお不動さん、お不動さんを買ってもらおうと思って家に帰った。そしておやじに、まず五十万円もらって来ましたと伝えましたら大変喜んでくれました。そして、おやじさん、もう一つお不動さんのことなだけでと話したら、おやじはいらないと言いました。どうしてかと聞きまじたら、「光真寺には子育て地蔵をおまつりしている。何故なら、長男が死んでいる……。……。おふくろが、三番目の子供のお産で長野の実家に帰っている間に、大田原の方の留守番をしている他の方が、四歳の長男に、

「独りでかわいそうだから」と、その当時めずらしくったバナナを食べさせたところ、食べすぎて死んでしまった。その化身が子育て地蔵としてまつられてあるし、それに、日光の輪王寺に縁があったそこのお大黒さんも光真寺にまつられてある。だからお不動さんはいらない。」と言ったんです。私は困りました。引き受けてしまったけど困ったなと思って居りました。その後、おじいさんから電話がありまして、観音様を取りに来いと言うんで、一応取りに生きました。インドに行く金はできましたが余分なお金は一銭もありません。そこで知り合いに、必ず返すから十万円貸して欲しいと頼んで、それを持って取りに行くことになりました。しかし、一切合財で十万円ですから、往復のキップ代一万五千円ほどです。「まあ、先生、金無いなら材料費だけでいい」と言っただけで、私が身につけて世界中持つて歩く一葉観音さま、それに一万五千円支払いました。残り残りましたのが、このお不動さまのお代であります。残り七万円しかなかったんです。で、おじ



いさんに、「私の全財産は七万円しかない。これではないですか」と言うと、「そうか……七万円か」と言う。「もう少しくれないか」といわれましたので、「どれぐらいですか」とたずねましたら、「あと二万円ぐらいから出してくれ」と言われました。私は十万円しか借りて来ませんでしたから、「今はこれしかありませんが、しかし、必ず送りますけど、今日明日では、都合が付きません。」と言ってお不動さんを抱いて東京の桐ヶ谷寺に帰ってきた。寺にいたのは夜十時くらいでした。そして、お不動さんを開けて、飾りましたら、これがとてもない力を感じました。これはすごいことになりそうだと思って寝ました。

へお不動さま光真寺へ

父親は朝たいへん早いです。私はまだ寝ている間に見たんですネ。そして私が五時すぎに起きると、お不動様にはお水が上げてありました。そこで父に挨拶をすると、

「武志、あのお不動さまはすごいな、あれはいいお不動さんだ。なんとかしよう。」と言うことになりました。

「お父さん、あれはまだお金を払わなくちゃならない。」と言うと、いくらだと申しますのであと二万円ぐらい



欲しいと言うと、光真寺の兄のところから出してもらおう。桐ヶ寺ではお飾りしてお寐りするところが無いから光真寺におかざりしよう。そしてお前の費用の足らぬ分は光真寺から出してもらおう。ということ、父は田舎に出掛けてゆき、母や兄と相談をしてお金をくれました。それで光真寺にお納めさせていただいた訳です。

#### 〈外国修行〉

行くなら、私は、インドだけでもつたいない、タイで修行しよう。どうせやるんだから誰にも出来ないことをやろう。と友人と相談したんです。その友人が石附周行氏で、一緒にインドに行く事になり、帰りにタイで修行を致すことになりました。

その後、タイに滞在中、管長の秘書の役目を仰せつかりましたので、帰国して、曹洞宗の管長高階瓏仙禅師という方の秘書になりました。ところが私は、こういう風な野人ですから、型にはまったことをするのが性

に合わないんです。偉い人のおそばに仕えている人たちというのは、虎の威を借りる狐といいますが、自分が偉いと錯覚をおこすんです。不思議なものです。稲穂は実れば実るほど頭を下げるんですが、それのわからない人たちは、稲穂じゃない。そんな訳でやめたけれど行く所がなかったんです。

そこで一生懸命努力して、アメリカにコネをつくつて、兄貴のところへ行きました。一回アメリカで映画に行ったら手紙も出す事ができないような生活でございました。だから、映画にも行かなければ、何処にも行かない。やったことは本読みだけ、あとは日記をつけた。今日まで、三十年間書き続けた日記は大変な量になっております。やることないから我慢しました。我慢して我慢してアメリカに二年余いました。その代わり、やることないから日本の宗教新聞に記事を書いて送りました。

——— 人生は修業だ ——— と、自分にいい聞かせて我慢したんです。

〈貧しい帰国〉

そのうち、石附君が結婚するといってきました。よし、今がチャンスだと思って、日本に帰った。ところが居場所も無ければ食べ物もない。東京の小さな寺ですからぬ。

アメリカの生活の中で大誓願をたてました。日本に帰ったら、何処か、でかいところがないか。山でも野でもいい。毎日、天に向って祈る毎日を過ごしながら、日本に帰ってきました。

ところが結婚式に出るのに着てゆく背広がなかったんです。それで私は、おやじに背広を買ってもらえないかと頼みました。二月六日に帰って、九日が結婚式、土曜日に帰って来て、日曜、月曜、火曜日が結婚式なんですネ。そうしますと、帰って来て次の日は、親に挨拶しなきゃいけないし、時間もなかったんです。

「おやじ着る物がない」って言いましたら、

「しようがないなあ」と言って松屋で背広を買ってく

れました。私はその時やせてまして、五十七、八キロしかなかったんです。いまは、六十四、五キロぐらいはあるんです。しかしその当時、大変やせてましたので、女の子に聞いたらその時はやりのピツタリしたのがいいということで、二万八千円の背広を買ってもらいました。それを着て結婚式へ行きました。背広は真新しいんですが靴はやぶけてたんです。アメリカのお医者さんに二十五ドルで買ってもらって一年半はいたものですから。

そして、結婚式では挨拶をしました。私の靴だけやぶけているんですネ。はずかしかったですネ。管長さん達がずらつといる中で……。「いやあ黒田、帰って来てよかったな。」「はい、帰りました。」「ふと足見たら、一、二センチやぶけているんです。脇のところか……。

一足三千円位の靴ですがね。それを買うお金がもつたいなかったんです。ましてや、背広を買ってくれた父に、靴も欲しいとは言えなかった訳です。相当愉快な格好だったと思いますヨ。

〈善光寺設立〉

その後、四月になってからですが、善光寺の前身であります長光寺の林方丈様がなくなつて、後継ぎがないと言ふことで、どうかという話があつたんです。

小さな建物で四百六十万円だという。大変なお金でした。一銭のお金も無い。着の身着のまま帰つてきて、背広をやつとおやじに頼んで買ってもらつて、一銭もない。四百六十万円なんて気の遠い話でした。それで



も、見るだけでもと思つて見に來ました。そしたら、建物はくさり、屋根のかわらは流れおちガラス戸はメチャクチャでどうしようもないところでした。いやいや、高い買物だなあと思ひました。しかも土地は別でしたが私はこれを買ふ決心をしました。それで私は、おやじのところへ相談に行き、桐ヶ谷寺で働かせてもらう事にしました。それで一生懸命東京の桐ヶ谷寺で働きました。さいわい三カ月間毎日仕事があつて忙しかつたので、よし、これで支払いができるメドがあつた

たと思いました。一日三回東京と善光寺を往復したんです。

私は、朝七時に、倫子に全部一日の仕事をいいつけて、ネクタイをしている間に手紙を書かせ、それを持ってバスで上大岡に行き投函して、そのあと、電車で品川より五反田の桐ヶ谷寺に向かい、法衣をつけて、火葬所の読経を致しました。そのあと着替えて、十一時には善光寺に戻り、公園墓地の読経をいたしまして、中食を済ませて、桐ヶ谷寺の一時の法事に間に合うように東京に向かいました。三時には、全ての仕事を終えて再び善光寺に戻り、七時からは又、桐ヶ谷寺の通夜に間に合うように出掛ける、一日に東京と横浜を三回も往復するということが続いた訳です。

若いから出来るのですね。そうやって借金を返し続けた訳です。人間は働かなくちゃダメですね。

そうして、一生懸命やって少しづつ皆さまの御信頼を受けるように努力させていただきました。一年半目になった時、光真寺から皆なで来てくれました。母は

今年八十三歳になります。最近は「善光寺の方丈さん」と私を言うんですが、むかしは「たけちゃん」と呼んでいたんです。母親はいいですね。やっぱり、親に心配かけたくないし、皆さんにうしろ指さされないように一生懸命がんばりました。

そんな訳でしたので、何もほしいと思いませんでした。長兄が「武志が田舎から出ていって、横浜に寺を作ったんだから、皆んなで行ってやるう」と言う事になり、何もやる物ないからお不動様を上げようと、バス一台にお不動さんと、実家の世話人の方が乗って来てくれました。

#### 〈不動明王勧請〉

それで、今日があるんです。毎日毎日、お不動さんにお礼を申し上げて居ります。本当にありがたいことでございます。それから田中先生という壺能者のおばあさんが、私を大事にしてくれました。私が今日あるのは、お不動様とそのおばあさま、そしてナリスさん

と皆様のおかげです。お不動さまをお迎えしてから毎月二十八日、誰が来ようと来まいと、十七年間一度も休まず精一杯おまつりさせていただきました。かならず誓願が成就すると信じて……。

前に申し上げたように、私はここに来て願いがかなわなかったことはほとんどないんです。全て、お不動さまがして下さいました。いいですか……。人間は自分がやるんじゃないですよ。仏さまがして下さいさるのです。これがわからなくちゃだめ。そうですよネ。

田中先生が、十七年前に私に言われました。「あなたは横浜に行きなさい。努力すれば、必ず道が開けます。そして、お不動様をしっかりとおまつりしなさい。」と……。

田中先生のお告げによると、このお不動様は身を七つに変じて、いかなる災難も救ってくださる。南無身変わり不動明王様であると……。教えてくださいました。

田舎からお不動様をお迎えする日の朝方、私はこん

な夢を見ました。

本山から私に電話がかかって来まして、当時、大本山総持寺の顧問会会長をして居りました父に至急連絡してほしい。総持寺が火災で燃えているというんです。私は、それはもう驚いて、父と連絡を取って二人で本山にかけつけてみますと、シンと静まりかえって、火事の気配は全くないんです。ところが中に入って長い廊下を歩いて行きますと、廊下の中心のあたりに、お不動様の台座だけがポツンと異様に置いてある。台座だけを残して、お不動様は焼けてしまっているんです。これは、お不動様が身を変じて総持寺をお救い下さったんだ。父と二人、心から感謝し合掌して家に帰ったという夢なんです。

#### 〈釈迦殿完成〉

私がこの善光寺に来て、つねづね欲しいと思ったものがありました。それは前の地続きの土地でした。前の土地がなければ善光寺は、次の代に伸びられない

と違って、毎日歩きながらお経をとなえて居りました。前の家に住んで居られたおじいさんは、軍人さんで、とにかく一徹な人で、山が崩れて家がかたむいても棒でつつかえ棒してでも住み、がんとして動かないような方です。しかし、縁がありまして、この土地を善光寺でお使いくださいと申し出があり充分お礼を申し上げてお譲りいただいた。これも本当にお不動さんのおかげでございます。

土地を買い求めてからは、全てが、順調に進みました。一銭のお金もありませんでしたが、銀行では五千万円の土地代を貸してくれました。土地がある事だし、早く建物を建ててはどうかと勧められまして、釈迦殿建立を誓願いたしました。

私ははじめ、七千万円の寄付を仰ぎましたが、工事をはじめましたら、檀徒の方々のおかげで、二億七千万円のお金が集まり、現在の釈迦殿が完成したのです。

総工費、三億七千万円かかりましたが、とにかく、無事円満に解決いたしました。

これはお不動さんと皆さんのおかげです。私は何もして居りません。こちらの不動殿も直そうと思って居りましたところ、最初に工事をしてくれた田舎の大工さんが、とにかく任せてくださいといわれるので、百坪近くの増改築を、三カ月程で完成させてくださいました。五千万円近くかかりましたが、何とか支払いの目安がつかえました。本当にありがたいことであります。

#### へ大誓願を抱いてへ

只今、たくさんの借金を抱えて居りますが、元気に頑張つて居られるのも、お不動様と皆様のおかげであります。その報恩行として、善光寺は海外留学僧派遣育英会を発足いたしました。なぜかと申しますと、これから必要なのは、世界に通用する人物だと信じるからです。

今日も、毎日新聞の全国版で紹介されて居ります。日本中の人が注目して居ります。

タイ国に田中、梅田両師を派遣いたしました。優秀

な方たちで、道心を持って修行していただくさいます。本当にありがたいことです。只今は、アメリカに留学する人々を募集して居ります。

善光寺は裕福な寺ではありませんが、どんな苦しい事があっても、これをやりとげたいと思います。

へ仏の世界へへ

人間は死がないですよ。許されて生かされているんだから……。永遠に大誓願を持って生きて行きたい。何もしないまま死ぬ訳にはまいりません。絶対死ねません。みんなもそれぞれに頑張ろう！ポーツと生きていてはもつたいない事ですものね。

お前は変わり者だという人もおりますが、変わり者じゃなきゃできないと思って私はやっています。

小さな世界、心の卑しい人とつきあっているのは淋しいことです。さいごに仏の世界に導かれて、心豊かな生活が出来るよう精進しよう！どうぞ、おおいに精進をして、努力して、命の尊いことに目ざめて、先祖を



大事にして生きていきたいものです。このすばらしい因縁ほど世界中どこがしてもない。これが一番すばらしいと思つて生きてほしい。家では、夫婦円満に、仏さまは大事に、子供たちと共に仲良くしてほしい。

今日の話はこれで終わりにしたいと思います。皆さんのおかげです。本当にありがたいことです。重ねてお礼を申し上げます。